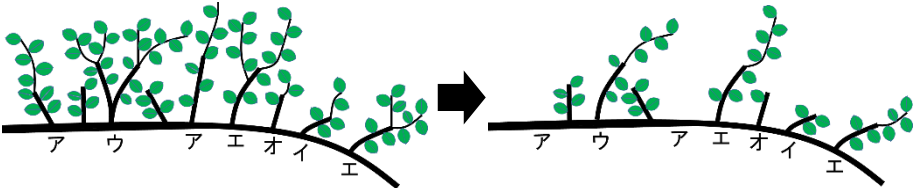


4 果 樹

項 目	作 業 内 容
<p>(1) かんきつ類の仕上げ摘果・樹上選果</p> <p>(2) 極早生、早生温州みかんの収穫</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○かんきつ類の仕上げ摘果・樹上選果 ○極早生、早生温州みかんの収穫 ○かんきつ類の夏秋梢管理 ○極早生・早生温州の秋肥施用 ○かき、キウイフルーツの収穫 <p>向こう1か月の天気は数日の周期で変わり、気温は高く、降水量は多く、日照時間は少ない見込みである（高松地方気象台9月22日発表）。</p> <p>温州みかんは、仕上げ摘果の時期であるため適期に実施し、夏秋梢管理や施肥管理など次年度に向けた作業も進めていく。</p> <p>ア 温州みかん 収穫間近となっている品種では、樹上選果で商品性が劣る果実を除去する。普通温州で、後期重点摘果を行っている園地では、10月中旬をタイムリミットとして、果皮表面が滑らかになり光沢を持つようになってからの仕上げ摘果を心がける。仕上げ摘果では、上向きの大玉果や小玉果、日焼け果や傷果などを除く。着果が少ない樹では仕上げ摘果を行わず、樹上で選果する。</p> <p>イ 中晩柑類 摘果で見落とした直花果、日焼け果、腰高果、果梗枝の太い極大果、極小果、傷果などを取り除く。着果が多い樹では樹上選果し、最終的な着果量に調整する。なお「甘平」の裂果した果実が腐敗すると隣接果へ影響するため、裂果果実は結果枝の基部から除去する。</p> <p>園地ごとに定期的に果実分析し、着色や糖度・クエン酸含量を把握のうえ、分割採取で品質の均一化を図る。収穫の際は、果実にハサミ傷を付けないよう注意するとともに、果実を丁寧に扱うなどして腐敗果の発生を減らす。</p> <div data-bbox="858 1662 1375 2038" data-label="Image"> </div> <p>写真1 収穫期のみかん</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(3) かんきつ類の夏秋梢管理</p> <p>(4) 極早生・早生温州の秋肥施用</p>	<p>夏秋梢は、樹勢の強い樹や着果の少ない樹に多く見られる。これらを放置すると、同化養分が夏秋梢の伸長に使われ、果実肥大の抑制や品質低下、耐寒性の低下につながる。園地や樹の着果状況、夏秋梢の発生状況を見ながら、平均気温が 20℃以下となって秋芽の発生が少なくなる 10 月中旬以降を目安に以下の管理を実施する。</p> <p>ア 夏秋梢のうち、強い立ち枝や樹冠内返り枝は基部から除去する。</p> <p>イ 角度が 45° 以内の夏秋梢は、夏と秋の境のコブの上で切り返し、春枝を発生させる。</p> <p>ウ やわらかい樹作りのため、日照条件を考慮して夏秋梢は 50～60%程度残す。</p> <p>エ 春枝から夏秋梢が多く発生している場合は、1 本だけ残して残りは除去する。</p> <p>オ 弱い夏秋梢はコブの下まで切り返し、充実した春枝を発生させる。</p>  <p>図 かんきつ類の夏秋梢管理 (左：処理前、右：処理後)</p> <p>収穫期前後に施用する秋肥には、果実生産で消耗した養分を補給し、樹勢回復や耐寒性向上を図る礼肥としての役割がある。また、翌年の花芽分化を促す基肥としての役割もある。秋肥施用が遅くなると地温が下がって吸収されにくくなり、礼肥としての効果が見込めなくなる。しかし、基肥の効果はあるため、適期を逃しても即効性の化成肥料等を確実に施用する。</p> <p>極早生温州は、収穫直前の 10 月上旬 (10 月中旬までに大部分収穫することを前提) と、収穫後の 11 月上旬に分施して樹勢回復を図る。早生温州では果実収穫を 11 月中旬までに終えるものとして、収穫最盛期の約 3 週間前に施用する。また、収穫後にチッ素成分主体の液肥を数回葉面散布し、早期の樹勢回復に努める。</p>

項 目	作 業 内 容					
<p>(5) かき、キウイフルーツの収穫</p>	表 かんきつの秋肥・晩秋肥施肥基準（愛媛県施肥基準）					
	品種名	目標収量 (t/10 a)	施肥 時期	施肥成分量 (kg/10 a)		
				チッ素	リン酸	カリ
	極早生	4	10 月上	8	6	6
		11 月上	5	3	3	
早生温州	4	10 月下	11	7	7	
	<p>ア かきの収穫 かき果実は完熟に至るまで肥大と着色、成熟が進む。早採りは避け、十分に着色した適熟果を収穫するよう心がける。また、収穫時に果皮を傷付けないよう気を付ける。濡れた果実の収穫は汚損の要因となるため、できるだけ乾いた状態の果実を採取するようにする。</p> <p>着色を促進する方法として反射マルチの設置が挙げられ、樹冠下に敷くことで秀品率向上や汚損果発生防止につながる。新梢管理を徹底し、樹冠内部の日照条件を改善することも、マルチの効果を高めるのに有効である。</p> <p>イ キウイフルーツの収穫 これまでのデンプン蓄積量と収穫1～2か月前の樹体の水分ストレスによって果実糖度が左右されるため、10月はかん水を控え、乾燥気味に管理する。ただし、過乾燥で落葉すると逆効果であるため、樹を観察しながら対応する。目安として、未追熟果の糖度が6.5度以上になってから収穫を開始する。なお、貯蔵病害発生防止のため、収穫前には殺菌剤を果実全体に丁寧に散布する。</p>					



写真2 収穫期のかき



写真3 収穫期のキウイフルーツ